

文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間 会報 No.61 2012年7月14日発行
川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団内 TEL 044-511-4951 郵便振替 00250-3-18369

『臨界幻想』 10 ステージ満席

6月8～10日、15～17日にスペース京浜で行われた『臨界幻想』の公演は、多くの方の関心と呼び、連日満席で最終日を終わりました。出演者や観劇者の様々の立場から感想を寄せていただきました。

異質な原発の姿をより多くの人に！

佐々木 和子

再演の要望は届いていますか。原稿依頼に愕いて、聞きそびれていました。「大飯原発再稼動！」が決定された今だからこそ、観るべきものとして、今後の再演をお願いしたいです。

福島事故が起こる前は、この狭い日本に54基もの原発があること、原発が日本に持ち込まれたのが第5福竜丸が被爆した翌年であったこと、原発立地が過疎地であること、どれも知らないことでした。



青年原発労働者の死。診断は心筋梗塞だが…

写真：長坂クニヒロ 以下同

そして、知れば知るほど、秘密のベールに包まれたなぞの塊のような原発を取り巻くのが今の日本の現状でした。

そんな中、私にとっていちばん身近な地元の劇団が31年前に初演された劇に取り組む……嬉しいようで怖いような思いを持ちました。

安全神話の中で、息子を信じ愛すればこそ、本当のことを知りたいと突き進んでいく母親。いつの時代も変わらない家族愛、友情が描かれ、真実を求める者の強さを感じました。



暁生の死の真相は

○中嶋哲演さんの話に恐ろしい現実を知る

事前に行われた福井の中嶋哲演さんを迎えての学習会も、充実した内容でした。

笠木透作詞、安達元彦作曲の「若狭の海よ」で始まった合唱は、3回の練習とは思えない迫力でした。まさに「歌」は「訴える」を実感しました。

哲演さんの話は、分かりやすく、素足で40年余訴え続けてきた実績に裏打ちされたものでした。原発立地をNOとはねつけた実力を良しとせず、まだまだ足りなかったと謙虚に話されました。受け入れた大飯町の人々にも事情があると頷かれながら、そこに追いやられた過疎地で暮らす人々の生活を語られ考えさせられました。

「臨界幻想」の公演を観たのは、「川崎母親大会」の日の夜でした。記念講演で「原発と私達の暮らし――



希望に満ちて就職したが



結婚の約束をした二人だったが

福島・浪江 異常な放射線量下で生きた記録」(郡山 総一郎)を聞いた後ただだけに、原発労働者が働く場面は身に迫るものがありました。想像はしていたものの、一つのネジを締めるのに、何人もの人がリレーで行わなければならない高線量の中での作業。使い捨てのように、限界まで働いた人たちが切られていくのは現実なのです。そしてそういう状況は、原発の稼働が止まっても、廃炉になって石棺ですっぽり覆われるまで、気の遠くなるような長い期間が必要とされるのです。国民の多くが望む脱原発を、現実のものにする術は、すべてを知らせることではないでしょうか。

9月に岩手で上演が決まったと聞きました。その間に是非是非再演を検討してほしいものです。

○家族でお世話になりました

思えば、劇団とのお付き合いは、20余年前にさかのぼります。それまでもいくつかの公演は観ていたのですが、「はだしのゲン」の公演に家族がどっぷり参加することになったのです。それぞれ役割が違い場面が違うので行きも帰りも別々ですが、一つのことに取り組んでいる一体感がありました。劇団が身内のような存在になりました。

長女15歳、長男12歳の年です。親とは、面と向いて真面目な話ができていく年頃でした。子どもたちは稽古を通して、時代を学び、生きることの難しさや強さや思いやる気持ちを学ぶことができました。

私たち夫婦にとっても劇団の存在は、楽しみであり



国会での追及

問題提起であり、代弁者でもあると思っています。

これからも、皆様のおくなくさきと探究心に満ちた舞台、知られざる歴史をあぶりだす舞台、時には風刺のきいた笑える舞台を期待します。私たちの街の劇団を誇りに思っています。

(京浜協同劇団の一ファン／文化の仲間会員)

卒業公演「臨界幻想」

齋藤 成郎

気づけば、臨界幻想が終わってからもう1カ月がたちました。いま「あの頃は充実した日々を送っていたな」なんて思ったりして、あの舞台がずいぶん昔のことのように感じられます。そしてこの公演で自分は研究生を卒業し、晴れて劇団員を名乗る許可を得ました。



病院で、息子の死の原因は...

劇団員になるということで思い出したことがあります。自分がこの劇団にはじめて見学にきたとき、和田さんが対応してくださったのですが、当時長髪で髪を伸ばすのが生きがだった自分は和田さんに「髪を切れなんていわれることはないですよ？」と確認をとったところ、「大丈夫！」とって笑っていたのに、いざ稽古が始まるといろんな人に「髪切れ」といわれたことです。最初は自分も抵抗していたのですが、結局切る羽目になりました。いまとなつては笑い話ですが、当時は「話が違う！！」劇団の和田さんにだまされた！！と友達に本気で愚痴をぶつけていたのもいい思い出です。そうこうしているうちに気づけばこの劇団にはいって、2年がたちました。これからは劇団員

としてがんばっていきたいと思っています。ご迷惑おかけすると思いますがこれからもよろしくお願い致します。

そしてこの公演を通していろんな人と交流できたことをうれしく思います。特に同年代の人が多くいたということがおおきな刺激となりました。本当にありがとうございました。9月の岩手公演もよろしくおねがいします！！
(劇団員)

臨界幻想雑感

「異質の危険」との共存の可能性

須根 芳太郎

脚本を読んで違和感があった。「暁生 原発と原爆は同じでねーか」。その違和感はクライマックスに原爆という言葉が唐突にでてきたためであった。芝居の



流れからすれば、「暁生 暁生は母ちゃんに原発は安全だと言ったがちっとも安全でねーではねーか。」とか「暁生 原発はお前を奪った上に母ちゃんたちの未来をも奪ったではねーか」のような表現ならばストーンと腑に落ちたかもしれない。

原発＝原爆とした理由はなんだったのだろうか。芝居のまとめとして原発は安全でない＝危険ということをし、「原爆」という言葉で表現しようとしたのかもしれない。ただ、これには観客が原爆は恐ろしいという認識を共有していることが前提になる。原爆を知らない子供や広島・長崎への原爆投下を正義の行為と考えている米国人からしたら言いたい意味が分るのだろう



か。芸術はさまざまな経験、知識を持っているほうが豊かな鑑賞ができるのだろうが、芝居の最後の場面で観客に対して認識の共有を求めるのはどうなのだろうか。

あるいは原発＝原爆をモチーフに「臨界幻想」を作ったのかもしれない。原発と原爆には「臨界」という同じ現象がある。原爆は臨界に達したら瞬時に無制限にエネルギーを解放し同時に強力な中性子線、ガンマ線などの放射線を発することによりあらゆる生き物を殺傷する。一方で原発は臨界状態を管理してエネルギーを電力として利用する。「臨界幻想」というタイトルは戦争利用でも平和利用でも原子力は人類にとって幻想でしかないというアピールのように思われる。原発＝原爆には賛否があるだろう。3.11以降は賛成が圧倒的かもしれない。しかし、私には納得できない部分がある。

四大文明発祥の地の多くは砂漠化している。農業・





伐採などにより豊かな自然が失われたためといわれている。人類の「異質の危険」の行為により生態系は破壊され、数千年経った今でも砂漠のままである。これに対し人間は、農業を「幻想」として破棄するのではなく自然と共存させていこうとしている。また自然を蹂躪した結果、人間にまで広がったといわれるエイズは「不治の病」（異質の危険）としてさまざまな偏見があったが治療法が精力的に研究されている。

そして原子力。

「異質の危険」は人類の進歩とともに“生態系→固体生命→分子→原子→素粒子”とそのレベルを変えていった。原子力の危険は原子、素粒子レベルの危険である。現在の原発は軍拡競争と表裏で開発されたが、日本の科学者の多くはそのような開発や日本への導入に反対し、原子力平和利用の基礎研究を訴えた。現在、核分裂の暴走が起きない「トリウム溶融塩炉」を研究している人たちもいる。人類はこのような人たちの取組、努力により「異質の危険」との共存の可能性を探ったり克服したりしてきたのだと、私は信じる。

(劇団員の家族)



考えて行動して、頓挫してまた考えて行動して…

常名 孝央

福島第一原発事故の現実を見た世代からすると、とてもフィクションとして書かれた脚本とは思えなかった。しかも、これが30年も前に書かれていたという。メルトダウンについては将来への予測可能な危惧としても、原発労働者の被曝と、その真相を追う母親や記者らの動きは、実録としか思えないリアリティをもって描かれている。それほどまでに『臨界幻想』は私の目に臨場感と説得力をもって迫ってきた。

1981年の初演当時、ウインズケールなど海外の原



発関連事故は見聞きしていたものの、まさか技術大国ニッポンにおいて、まさか「石油に替わる夢の新エネルギー」で、まさか環境にも優しいはずの原発で、しかも「日本一安全な空間」と言われた場所で働く労働者が放射能が原因で身体を壊すなんて、文字通り「ありえない」話だったはずだ。その証拠に、本作を「SF」と揶揄する論者すらいたと聞く。

しかし、そんな世情の中で作者のふじたあさや氏は「絶対的安全」なものなどないという「絶対的真理」



に基づき、一人の原発労働者の死を題材として、数年後にバブル景気を迎える日本人に対し原発の危険性を啓発した。そして、あらゆる「安全神話」に疑問を持つことをメインメッセージとして「みんな、騙されるなよ」と、今から30年前に伝えた。

原発で働く息子を心配して「どうも原発と原爆とは言葉が似ているから」と無知を覚悟で口にする母親に対し、「そんなこと言っていると笑われるぞ」と息子がいさめるシーンがあるが、「それでも心配は心配だよ」という母親の言葉に作者の思いは凝縮されているように思う。どんなに上手に、誰に何を言われたとしても、「心配だよ、怖いよ、不安だよ」という当たり前の感情が流されることのないようにしてほしいという心からの願いだろう。



晩生の墓前で

かがお湯を沸かすために、どうして核分裂を起こさせる必要があるのだろう」という素朴な疑問を誰も口にできない社会こそ、私たちが最も恐れなければならないことだ。

本年5月5日、この国のすべての原発が42年ぶりに停止した。都心では原発廃止を求めてきた若者ら4千人がパレードを行うなど、全国で脱原発への第一歩を喜び合った。だが、1カ月後には大飯原発の再稼働を首相が決定。官邸前に4万人を超える市民が撤回を求めて集まるもマスコミはほとんど報道せず、市民らの声は見事に抹殺された。

決して明るくない未来だが、とはいえ悲観してはいられない。お金さえあれば海外に逃げたくもなるが、幸か不幸かそんなお金はない。いまいるここで、やれるだけはやっていこうと思う。考えて行動して、頓挫してまた考えて行動して…。そんな勇気を改めて今回の舞台で頂いたような気がする。

京浜協同劇団と共に歩む「文化の仲間」の新人として、これからも期待しています。共に頑張りましょう！
(文化の仲間新入会員)



ムラサキツクサに変化が

さらに、舞台を見終えてじわじわと沸いてくるのは「常識はいつも誰かが作る」という、人間にとっての歴史的事実だ。「こんなもんだ」「仕方がないだろう」「当たり前じゃないか」といった言葉には、時として「国のため」「社会のため」「会社のため」といった目的語がくっつく。その結果、泣くのはいつも弱い者だ。「た



カーテンコール

頭の中でコネクリ廻していたのでは逆立ちしても思いつかない未知との出会いが

安達 元彦

まずは引用から——

京浜協同劇団は「ぼくの音楽学校」です。ということは「人生の大学」ということでもあります。出会いは1968年『コンペア野郎に夜はない』。わたくし弱冠28歳。ちなみにこの年、初めて音楽でお金をもらっています。作曲稼業元年。

(京浜協同劇団創立50周年記念誌『この日この地でこの人々と』)

「初めて音楽でお金をもらっ」たのは、同じ年の2月、舞台芸術学院第10期実習科卒業公演『セチュアンの善人』(ベルト・ブレヒト作/関きよし案出)でした。

ここに至るまでにはぼくなりにはちょっとした葛藤というか悩みというか、がありました。

ぼくは1962年(22歳)から作品が放送や舞台上で演奏され、それまで自室に閉じこもってひとりシコシコ書いていたものが人前に出るようになっていました。作品による社会活動への望みが少しずつ叶い出していました。それは純粹の芸術活動であり経済活動ではない。つまり作品は売るものではないという思い込みがありました。尊敬する先輩たちにも生活は音楽(作曲)以外のことで立て作品活動は自腹を切ってやる(つまり金を稼ぐのではなくて、金を使う)という人たちも少なくありませんでした。それがあべき作曲家の姿に見えていました。ぼくも20歳前くらいから写譜のアルバイトで(フリーターですね)まあ一応自活しておりました。そして「作品(作曲)は売っちゃいけない!」

それがいきなり前述のお芝居(キッカケは誰かの紹介だったのでしょうが忘れしました)。お芝居から要求

される音楽は実に具体的でハッキリしたものです。それはぼくが作品で追究してきたものとはまったくかけはなれたものでした。40余曲ものソング。まず歌いやすいこと(器楽作品ではそんなこと関係ない)。期限付き(自由作品に期限はありません。1曲書くのに2年くらいかけていました)。音楽の全体像も作品とは根っから異質なものでした。……それでどうだったのか?これがオモシロかった!まず、密室でああでもないこうでもないひとり頭の中でコネクリ廻していたのでは逆立ちしても思いつかない未知との出会い。それと集団創造。実習科は夜間で昼間働いている人が多かった。予算がないこともあって、役だけじゃなく衣装や道具、宣材などなにもかも自分たちの工夫で手作り。みんな遅くまで目を真っ赤にして汗まみれ垢まみれ。こんな人たちにまみれてそれまでであったはずのチャチな芸術上の信念(?)など、気もつかないうちにコッパミジン。葛藤も悩みも入り込むすきはなかったんですネ、実のところ。でもやっぱり変節ですよネ。

こうして味をしめたあとに出くわしたのが京浜協同劇団でした。



会報編集部から

安達元彦さんは、1960年代、芸術祭優秀賞など、いくつかの賞も受賞され、現代音楽の作曲家として忘れられない作品を創造されました。

やがて京浜協同劇団と出会い、稽古場通いも40年余り。ミュージシャンとして、また、劇団と共に歩む文化の仲間の一人として、安達さんが、い

つの日かその「音楽活動」を会報に連載して下さる日を待っていました。

連載(6回の予定、もっと増えるかも…)をお引き受けいただき感謝いたします。

「京浜協同劇団と私」の第1回、まずは「前史」から、じっくりと語っていただきます。

『臨界幻想』で銀河ホール地域演劇祭に参加

岩手県西和賀町の銀河ホール地域演劇祭実行委員会から、京浜協同劇団に『臨界幻想』をもって参加してほしいとの要請がありました。

劇団としては負担が大きいことや日程上出演が難しい人がいること、さらに秋の公演の関係から一度は断っていましたが、原発をやめさせる運動に貢献し、被災地東北の激励になればと、出演することになりました。

演劇祭は、9月1日(土)、2日(日)の2日間。数劇団の参加で行われます。京浜協同劇団は、2日の午後上演します。

文化の仲間世話人会からは、山木さん、小野寺さんが劇団の皆さんと一緒に銀河ホールに行き、観劇します。また、同じく世話人の塩田さん、渡辺さんは、出演者として参加します。

今回の演劇祭の参加にあたっては、劇場の大きさが大きくなることから装置の作り直しが必要なこと、30人に及ぶ出演者・スタッフが岩手まで往復する交通費など、多くの経費が必要なことから、派遣カンパを募っています。ご支援・ご協力をお願いします。

(会報編集部)

銀河ホール地域演劇祭

地域に根ざした劇団のすぐれた舞台を全国から毎年、数劇団招いて銀河ホール(客席数338)で行われる演劇祭で、演劇界から高く評価されています。今年は第

20回目の記念の年となります。

湯田町、沢内村が数年前に合併して西和賀町となりましたが、町をあげての演劇祭となっています。町民が1年間に生の舞台を観劇する回数は平均で13回に及ぶといえます(全国平均は1回未満です)。

京浜協同劇団はこれまでに「権兵衛太鼓」、「鉄道員(ぼっぼや)」、「腹話術ゴローちゃん」などで4回出演しています。

第40期・新人、研究生を卒業!

今回の『臨界幻想』が、第40期新人の卒業公演に当たります。3人の新人の上村健太郎さん、斉藤成郎さん、大谷敏行さんは、それぞれ個性を発揮して今回の舞台の重要な役を務めました。これで、3人は正式に「劇団員」となります。

これからの活躍を期待したいと思います。



研究生を卒業した新人3人(2011年3月新人発表会で)

(写真:長坂クニヒロ)

大橋喜一さん、ありがとうございました

京浜協同劇団 城谷 護

劇作家で劇団民藝所属の大橋喜一さんが5月27日、前立腺癌のため、亡くなられた。94歳だった。

大橋さんは1917年(大正6年、ロシア革命の年)、東京生まれ。東芝小向工場で働きながら、演劇部で活動。1956年、「楠三吉の青春」で新劇戯曲賞、68年、「ゼロの記録」で小野宮吉戯曲平和賞を受賞。

大橋さんは、三つの劇団が合同して京浜協同劇団を創立する時に、合同のあり方や劇団の理念などを巡っていろいろとアドバイスしてくださった。また、劇評などでも大変お世話になった。神谷量平さんとともに私たちの劇団の特別劇団員となっていていただいていたのはそういう訳からだった。

わが劇団は「煙突のあるオアシス」、「ゼロの記録」、「コンベア野郎に夜はない」などの大橋作品を上演させていただいた。いずれも好評だった。私たちが私の働いていた造船所の現場を描いた「902番船、進水!」という集団創作劇を上演したとき、大橋さんはこの公演を「川崎の文化的事件」と新聞で評価してくださったことが印象深い。

大橋さん、長い間、本当にありがとうございました。ご冥福をお祈りします。

◎文化の仲間通信◎

◆第30回 みんなでつくった平和公園みんなでつくるコンサート 2012

日程 7月22日(日) 午後5時開演
会場 中原平和公園 野外音楽堂
入場無料 参加協力券 800円
出演 まぁ〜どれ・さいわい/コールアゼリア/合唱団いちばん星/神奈川合唱団/合唱団きずな/松本良江/吉川敏男/ねぎぼうず/SAX-モード/松平晃/川崎太鼓仲間響/日吉エイサー隊 ほか
平和公園が生まれて30年。平和公園コンサートも30回目を迎えます。

問合せ 松平晃 044-411-6402 柳沢明信 044-422-5638

◆第38回 日本フィル夏休みコンサート 2012

日程 7月22日(日)/8月5日(日)
各日午前11時・午後2時 開演
会場 横浜みなとみらいホール
入場料 S席 子ども3200円 大人5000円
A席 子ども2500円 大人4000円
B席 子ども1800円 大人3000円
指揮 川瀬賢太郎・園田隆一郎/お話と歌 江原陽子
管弦楽 日本フィルハーモニー交響楽団
演目 第1部 これがオーケストラだ! (交響曲第5番《運命》第1楽章、《四季》より“春”第1楽章ほか)
第2部 バレエ《白鳥の湖》 第3部 みんなで歌おう! (夏の思い出、《アイダ》より「凱旋行進曲」)

問合せ 日本フィルサービスセンター 03-5378-5911

◆川崎市民劇場 第309回例会

テアトル・エコー公演 フレディ
日程・会場 8月6日(月)・7日(火) エポック中原
18日(土) 幸市民館
作 ロベール・トマ/演出 上原一子・小川こういち
/出演 安原義人・田村三郎 ほか
天才クラウン・フレディ率いるサーカス一座。かつての人気も今は昔。金策に走るフレディだが、訪ねたパトロンが何者かに殺され、殺人犯の疑いをかけられてしまう。彼らの行く先は……。死刑台の階段か、成功の階段か、それとも……。

申込み・問合せ 溝の口事務所 044-455-7950
川崎事務所 044-244-7481

◆第14回 響け! みやまえ太鼓ミーティング
太鼓でひろがる輝望の輪

日程・会場 8月19日(日)
第1部 14:00~ 宮前市民館大ホール
第2部 17:55~ 市民広場
参加団体 第1部 横浜都筑太鼓/平保育園/南平こども樽太鼓/宮前区文化協会/ひばり太鼓会/鼓音と楽鼓隊/どんどこ 第2部 川崎太鼓仲間響/里空/大塚太鼓/野川親子太鼓大地
ゲスト 歌舞劇団 田楽座
太鼓体験コーナーがあります(第1部の休憩時間)。
また、11:00~16:00 市民館2階グループ室で着付け

コーナーを開設します。浴衣などをご持参ください。
問合せ 実行委員会(宮前区役所地域振興課)
044-856-3125

◆かがり火の中の和太鼓コンサート in 築田寺 V

日程 9月1日(土) 17:00 開演
会場 築田寺(町田市忠生2-5-33)
入場料 一般2000円 小・中・障がい者1000円
出演 友野龍士・無限・川崎太鼓仲間響・和太鼓集団きらり
構成・演出 玉田菅雄/協力 築田寺・太鼓センター
主催 OHANA プロジェクト/後援 NHK 厚生文化事業団・国際ソロプチミスト町田
問合せ 事務局 042-785-4175
メール: info@ohana-group.com

◆まぁ〜どれ・さいわい 第6回コンサート
東北に思いを寄せて

日程 9月30日(日) 14時開演
会場 ミューザ川崎 市民交流室
参加協力券 800円
指揮 山寺圭子/ピアノ 山内千晶
プログラム 第1部 北上夜曲・青葉城恋歌・会津磐梯山 ほか / 第2部 秋の子・椰子の実・赤とんぼ / 第3部 組曲「いのちのあゆみ」
問合せ 新日本婦人の会幸支部 044-541-3128

◆川崎市民劇場 第310回例会

劇団俳優座公演 樫の木坂四姉妹
日程・会場 10月6日(土) 幸市民館
10月8日(月・祝)・9日(火) エポック中原
作 堀江安夫/演出 袋正/出演 大塚道子・岩崎加根子・川口敦子 ほか
坂道の名は樫の木坂。被爆者である老三姉妹の家には、その生活を撮り続けているカメラマンが通っていた。

■文化の仲間ギャラリー■

小野寺 晃⑦

